

ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル

調和の文学創造と人間関係の不調和

長谷川 淳基

Robert Musil und Alfred Kerr

Harmonie im literarischen Schaffen und Disharmonie in der menschlichen Beziehung

Junki HASEGAWA

I 始めに

ムージルとケルとの関係は、総じてどのようなものであったというべきか。1905年、『テルレス』を介して二人は初めて出会った。『テルレス』はケルの後押しを受け、1906年、華々しく世に出た。ムージルは引き続いてエルンスト・マッハに関する学位論文を書き上げ、その後1911年に第2作目の小説集『合一』を発表する。第1次大戦を挟み10年の空白のあと、1921年に戯曲『熱狂家たち』の刊行、そして1923年には『ヴィンツェンツとお偉方の女友達』が舞台に上った。ケルはこの『ヴィンツェンツ』について批評を発表した。ムージルの作品を論じること、これが第2回目となる。そして1929年4月、『熱狂家たち』が遅れて舞台に上った際にも、ケルはムージルの作品に関してペンを取った。この第3回目の批評が出たのは、1905年の出会いから数えて24年目のことである。

そしてこのあと。

二人の間には、直接の会話、あるいは手紙、あるいは電話でのやりとり、その他いかなる形であれ、意志の疎通があったことを示す資料はない。

ムージル畢生の大作『特性のない男』第1巻が出版されるのは、翌1930年のことである。ムージル、50歳の年であった。1867年生まれの方のケルの方はこの年のクリスマスに、63歳の誕生日を祝うことになる。

1930年代、やはりこの二人にも波乱に満ちた過酷な人生が待ちうけていた。1933年2月、ケルはドイツを去った。ムージルは1938年8月、オーストリアを出た。ケルは戦争の時代を生き抜き、1948年9月にドイツの地ハンブルクに戻ることができた。直後、病が襲った。同年10月12日、80年と10ヶ月の生を閉じた。ムージルの亡命生活は4年に満たなかった。1938年8月に始まったムージルの亡命生活は、39年、40年、41年と続き、42年4月15日、ジュネーブであっけなく終わりを告げた。ケルより13歳年下のムージルの、61年と5ヶ月の人生が終わった。

ケルの81年に及ぶ人生、同じくムージル62年の人生に於て、二人の関係、互いの存在は

どのような意味を有していたのか。

II ケルの弔辞

ムージルは1942年4月15日、ジュネーブにて卒中により死去した。ムージルの訃報はイギリスにも届き、ロンドンのドイツ人作家PENクラブはムージルを追悼した。その際には、1939年以来クラブの会長を務めていたアルフレート・ケルが弔辞を述べた。その弔辞のタイプ原稿が残っている。

ムージルと私、私たちはこの本『テルレス』のすべての行に互って、手書き原稿の段階から、ただ単に目を通すというに留まらず、——細部に至るまで、一緒になって仕上げに取り組んだ。

ムージルが私のもとを訪ねてきたとき、(今日ひとかどの人物として成功を取めている大勢の方々とは異なり)それは彼が学業半ばにあった時期ではなく、——彼はすでに工業専門学校を出ていた(シュトゥットガルト)。

彼はその人生にあって、私がこれまでに出会った中で最も魅力的で、軽やかにして重みのある人物の一人であった。

一人の(外面的にもまた)耽美的感覚を備えた人間——耽美主義者にあらず！(というのも彼にはほのかなユーモアがあった)

彼は深く物思う人間だった——しかし、その沈む重さに反して、軽やかにして重みのある物思う人間。

……ムージルは大人と子供が混在する人物であり続けた。眼前に存在する理解しがたい事柄を、食い入るように、絶望的とも言える様子で——しかしながら、かぶりを振るそのしぐさから分かるように、なおも明るさを失わずに、その事柄を見つめるのであった。彼は、あらゆる解き難いものに対し開かれた人物であった——かつ、決して絶望することがなかった。ないどころか、微笑さえ漂わせる批評家。

そして、私はムージルを愛していた。彼は殴り書きせず、書いたという理由で。ドイツにはことわざがある。「女性も魚も、真ん中のところを頂くに限る！」と——詩人については、必ずしもこうは言えない。

ムージルの「真ん中のところ」(すなわち『テルレス』の後)は、彼の極上部位ではなかった。

抜きん出たものは、1930年に再びやってきた、『特性のない男』。

巨大な小説。その巨大な量ゆえの巨大さではなく、その巨大な充溢ゆえの巨大さ。すなわち、ある時代の(ドイツにおける)文化政治についての考察、ある社会(同じくドイツ)の考察が、自我の省察と混ざり合う。彼の自我、このうえなく価値のある自我。今、彼の体を離れた自我は、生き続ける。

そう、彼は行ってしまった。62歳——あの時の、小さな工業学校の学生が。

不思議だ。

無常を歌った詩句が思い出される、かのホーフマンスタールの詩句。『エレクトラ』の中の人物が言う、「流れて行くもの、それは川のことではない——それは私、この私のこと」。私は詩人ローベルト・ムージルを友人として見送る——感傷的な気持ちはよすことにしよう。無常を感じさせてくれたこと、無常を感じる生命の感情を呼び起こしてくれたこと、彼の死が我々すべてに与えてくれたこの気持ちについて、彼に感謝しよう。¹⁾

一読して分かるように、これは完全原稿ではない。弔辞全体の趣旨に沿って要点を列挙したメモと考えてもよいかもしれない。それにしても、ムージルの語るケルの言葉には独特の響きがある。弟子と師、庇護感情と愛、理解と評価、二人の結びつき……、この文章からはこうしたものを読み取ることができる。批評家ケルが小説家ムージルの仕事について語る部分と、プライベートな感情で繋がっていた関係の吐露、この二つが巧みに絡まって、全体が構成されている。

この文章は弔辞である。特別の機会での挨拶が、特定の調子を必要とすることは普遍の事実であろう。ケルがムージルの作品を評している部分、これは何と言っても批評家であるケルの自由である。その批評が正鵠を得ているかどうか、これはケルという存在の意味・無意味に関わる問題として議論がなされ得ることがらであり、最終的にはケル自身に跳ね返っていく。が、他方、ケルがここで述べているムージルとの個人的な関係・事実については、ことの性質が別であり、弔辞の受け取り手あるいは読み手の側には、これを受け止める感情の形といったものが発生する。

「そして、私はムージルを愛していた」、どのような心情が働けば、どのような状況があれば、75歳の男が62歳で死んだ男に、こうした言葉を発することができるのであろう。以下、1929年の「熱狂家たちスキャンダル」以降の二人について考察しながら、この疑問への答えを探してみたい。

III 『特性のない男』におけるケルの影

その1 ラケエルあるいはラヘル

1930年10月、ムージルの『特性のない男』第1巻が出版された。この『特性のない男』の中に登場する人物の一人であるラヘルは、もともとケルによって描き出された一人の女性をモデルにしており、この女性を『特性のない男』に登場させることでムージルは一種の自己推薦状を、ケルに対し差し出している、とはカール・コリーノの説である。²⁾

ラケエル

I

私の窓の前に
光を放ついちじくの木が茂っていた……
— — — — —
— — — — —
白い河エッチュはさざなみを立てて流れ
湿った大地はぶどうの香りを漂わせていた
世界は、すべての灌木と共に
わたしの窓に侵入して来た

これは、どこのことだったのだろうか？ それは……ドイツ語がまだ通じるころ。やせた低地と違い、そこには美しい花が咲いている。私は、その地を離れた。

II

……そして私は町にやってきた。奇跡の町、没落の町。海辺の夜の美しさ、こまかな光

の哀しみ。憂愁と優美の婚礼。私がこの地へ足を踏み入れること、これで三度目ということになった。その地では過去これまでに、何週間にも互り滞在した。夜、この町は輝いた。より深く、より豪奢に、死はより遠く昔へ、不死はより彼方の未来へ。青銅のライオンが、まどろみつつも円柱の彼方へ、噴水の彼方へ咆哮の声を上げ、そしてその翼を打ち振るわせる。黒い棺のような小船が運河の横丁を、栄華の跡をとどめる家々へと向かう——昔の姿を今に残す大理石の階段は、密やかにやすらぐ闇へと向かう。石の頭像が建物の庇から睨みをきかす。

III

さて私は、当時ヴェニスでこの身に起こったことを、事実のままに報告しようと思う。取り立てて何ということもない出来事。この出来事はこれを経験した者にとってのみ価値があり、これを聞かされる人々にとっては、何らの価値もないものかもしれない……そういうことならば、人は実際にかかわりを持った事柄について、最も話しやすいということ（そうしたものの以外については語らないということが、最も立派な態度であること）、こうした言い訳でご容赦いただきたい……私、私が、この私が体験したということが問題なのではない。逆である。体験された事柄が語られるということ、これが肝要な点である……さらに言うといくつかの事実については、語り手を感傷的なライトで、あるいは英雄に向ける明かりで照らすことは、適切ではない。むしろ、こう言った方がよいかもしれない。語られたことが放つ輝きの大部分は、都市を、都市の魂を照らす、と。

IV

古びた旅行書の表紙裏に1894年の日付の入った一枚の領収書……そして2通の手紙。これらの手紙の日付は1895年、ヴェニスの市民の娘からドイツに向けて差し出されたものであった。書き出しは、ジェンティール・シニョール……（ここにファースト・ネーム）、そして明るい調子で結ばれていた——心からのご挨拶をお送りいたします R.。本文の内容は以下のものであった。きょう手紙の差出人の幼いこが、彼女のところへやってきて、そして手紙の受取人である男性を確かに聖マルコ広場で見かけた、と話した。ヴェニスにいるというのは本当か、それともベルリンにいるのか、と。……奇妙な感じがする。何年かの後に旅行書の中にそうした手紙を見出すとは。小市民出のこの美しい娘は、当時私にヴェネチア方言の会話を教えてくれていた。いく晩もいく晩も、私たちは会った。そして彼女は——そうでなければ外出を許されなかった——いつも8歳になるいとこと一緒だった。この子の母親の家に、娘は身を寄せていたのだった。時々この子が午後、聖マルコ広場で待っていてくれて、逢う約束を記したメモを運んでくれた。一切はすばらしく快活だった。しかしまた、おのずから厳かな空気も漂い、豊麗なるもののうち最も豊麗なるものが、溢れ返る過去の余韻の音とともにこの町を覆う。ラケエレ、ヴェネチア風にラケエル、彼女は乾いた美しいくろ髪を持ち、背が高く、か弱い感じの娘だった。彼女が伸びをするとき、あるいは、ヴェネチア女性が好んで羽織っているあの長いストールを、彼女が、そのしなやかな愛らしいしぐさで、半ば放心のうちに、肩に掛け直したとき、それまで予想だになかったことだが、彼女の体から光が放たれるような気がした……真っ暗闇の中でも、私は彼女の姿を眺める。静寂が支配する教会への通り、雨に降られ、急いで市門下の漆黒の通路で急場をしのいだとき。彼女は私と並んで立っていた。少女はずっと離れたところで、お菓子を頬張っていた。

私は彼女を眺める、外出してワイン酒場に立ち寄ったとき、灯りとてない町はずれ——広い空の下で私たち三人はテーブルについた。このテーブルは古い切り石を利用してしつらえられていた。そして私たちの眼前に、彼方の海の中から糸杉の茂る石の島が浮かび出る——教会の墓地。あの時も彼女は私と並んで座っていた。そして、それからも幾

度となく。

V

あれから6年が経過した。ある夜、私は何かに突き動かされたかのように、その家を探した。書付の最後のところに記されていた家を。できることなら私はこう聞いて回らなかった、6年前このあたりで親戚の家に身を寄せていた、名前をこれこれという娘がその後どうしているか、誰か知っている者はいないか、と。セレナードの音が聞こえる中、雑踏を潜り抜け、ただやみくもだった。格子垣のある海岸通、古い泉のあるくすんだ色の町外れを通り、カーテン越しに光の洩れる酒場をいくつもやり過ごし……そして、その小路はあった。麗しの聖母マリア教会すなわちサンタ・マリア・フォルモーザ教会に程近い場所であった。

[…]

こうして、男は古い手紙の住所にたどりついた。果たして、彼女はこの家に住んでいた。6年を経た今、彼女は以前のままだに愛らしく、言葉に尽くせない魅力を漂わせていた。当時は18、今は24才だった。窓辺に、格子枠のついた小さなベッドがあった。1歳に満たないと思われる小さな、丸々とした赤ん坊が眠っていた。女の子だった。男が、どなたのお子さんですかと尋ねると、彼女は「エ ミーア」私の子供です、と答えた。男とラケエルは6年前を振り返って言葉を交わした。彼女は二人の間で交わされたどの会話も覚えていた。陽気で柔らかな話し方はそのままに変わらなかった。気品は王女を想わせ、快活さはコロンビーネ、美しさは聖女、そしてその静かな立ち振る舞いはヴェネチア女性のものであった。そして、赤ん坊の父親はシチリア出身の船乗り、ラケエルはその男と正式に結婚していなかった。親戚筋から、また特にラケエルの母親から、ラケエルは非難され咎められていた。

男は数日ヴェニスに滞在し、毎日ラケエルと会った。最後の日、「家のそばに来ると彼女はもう一度私に腕を回し、そしてささやくような声で、ごきげんよう、と言った。夜は更けていた。彼女は窓に目をやった。今は、小さな娘のことを思っているかのように。街灯のあかりが彼女の目に落ちた。そして、彼女は音もなくするりと家に消えた。」

IX

水の街に隠れて……、小路に、世界の出来事から離れて、神の被造物たる人々は生きている、光に溢れ繊細に、優しく快活に、優美な気品を漂わせ。

ヴェニスの女性たち。

彼女らは世界を見る、聖マルコ広場にやってくる時。あるいは、窓辺に寄り添い夜が更けるまで小路を眺めているとき。人生のざわめきが止む。私たちは彼女たちについて何も知らない——ひとり、またひとりと、いずこへか帰っていくことを除いては。潮時、胸の鼓動を覚えながら、彼はその地に別れを告げた、もう何年も前のこと。

花輪はその位置を変える。高い土地にも低い土地にも、夏の盛りの歌は流れる。星々は宇宙の中を輝き、落下する。そして幸福の痛みが残る——すべてを手にすること、すべてをのどを通して飲むこと、すべてを歯で噛み、食べることはできない。そして人は、今日のまま、今日のままに、今日ありえたままに、そのままに留まることはできない。

人生とはこういったもの。クエスタ・エ・ラ・ヴィータ、サッチ・イズ・ライフ、セ・ラ・ヴィ、セ・ラ・ヴィ、セ・ラ・ヴィ。³⁾

ケルのこのエッセイは1912年に「パーン」誌上に初めて発表された。⁴⁾1910年にパウル・カッシーラーとヴィルヘルム・ヘルツォークが始めたこの雑誌については、雑誌刊行当初にベルリン警察から雑誌の発行を差し止められる事件があり、この騒動にまつわるケルとムージルの関係についても述べるべきことがあるが、稿を改めて論じることとして、本論の先を急ぐ。

「パーン」はムージルにとって特別の雑誌であった。工学部門に関係した幾つかある彼のエッセイは別にして、この「パーン」に掲載されたエッセイ「芸術における猥褻性と病的なるもの」(Vgl. P. 977ff.)こそは、ムージルの処女エッセイである。雑誌への寄稿、その掲載等について、ケルの推輓があったことは間違いない。他ならぬこの「パーン」に載ったケルのヴェネチア旅行記を、ムージルが読まなかったと想像することは難しい。ヴェネチアはムージルにとっても特別の町であったからである。この点については後ほど、もう一度言及することにした。

さてケルのこのエッセイであるが、これは戦争を経た後の1920年に、彼の旅行記をまとめた二巻本『光の中の世界』にも再度収められた。「パーン」に載ったエッセイ「ラケエル」は、これ一つ独立したものであったが、本になったときには「ヴェネチア方言」の表題のもとに、8編のエッセイが並び、その最初に「ラケエル」が置かれた。因みに現代の読者、すなわち我々は、現在刊行途中のケルの作品集でこれらを読むことができる。

先のコリーノの考えに耳を傾けよう。『特性のない男』を執筆する際に、ムージルはケルへの配慮を示した——ムージルとケルの関係を考察しているコリーノは、このエッセイに注目して、そう推測している。

特性のない男ウルリッヒの従妹ディオティーマは、フランツ＝ヨーゼフ皇帝の即位70周年の式典をドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の即位30周年の式典に劣らないものにするための使命を帯びて、ウィーンで大規模なサロンを主宰する。このディオティーマに仕える小間使いがラヘルである。このラヘルモデルに当たる人物が、ラケエレ嬢、ケルがヴェニスで出会った女性である、というのがコリーノの説である。

ディオティーマの小間使いラヘルは Rachel と綴る。しかしディオティーマは諸事万端、どのような細かなことであれ心配りを怠らない。なにごとにも上品さは基本中の基本である。したがってディオティーマは、ラヘルの名をドイツ風ではなく、ラシエル Rachelle とフランス語に翻訳し (MoE, S.163), そう呼びかけるのである。ケルが書いているヴェニスの女性は Rakéele ラケエレというのが本来であるが、エッセイ中にもある通り、ヴェネチア風に心がこもると Rakéel' ラケエルとなる。⁵⁾

コリーノは二人の女性の共通点としてさらに、二人には婚姻によらない子供がいることも言っている。つまり、小間使いラヘルは19歳、故郷で恋をした後、今では1歳6ヶ月になる小さな娘がいた。コリーノは、ムージルがこのようにしてケルの描いた人物を自らの作品に描きこむことで、「ケルに対して推薦状を提示した」と考えている。すなわち、私を、あるいは、この作品を、どうかよろしく願いいたします、との自己推薦状である。

以上の点に関しては、なるほど、研究者というものはいろいろと調べるものだ、という感想以外にはない。すなわち、コリーノが指摘している点については、確かにそうした連想が働くことも理解できるのであるが、二人の女性のイメージが相当に隔たっており、果たしてこの「推薦状」にどれ程の効果があったのか、と考えさせられもするのである。さ

て、しかしながら、このエッセイについては、ムージルとの関連で別の側面を指摘することができる。以下その点について考察を続ける。

その2 熱狂家の手跡 もう一人の「熱狂家」ケルについて

新版のケルの作品集では旅行記は第Ⅰ巻をなしており、二冊に分かれている。すなわちⅠ－1が国内旅行記『体験、ドイツの風景、人、町』、Ⅰ－2が外国旅行記『体験、世界への旅』である。こちらの外国旅行記はヘルマン・ハールマンが編集している。⁶⁾彼はこの本の解説を書いている。解説の内容であるが、旅行はケルという人間の内実を豊かにする必須の要件であったこと、そして同じくケルの旅行記により自らの人間性を豊かにしようと期待を込めて待っている読者、この読者をも代表しての旅行であり、旅行記であり、かつ

その際にケルは彼個人について報告することにも、何ら躊躇するところはなかった。そうした緊張とともに生きる人生、そうした緊張により文字にされる人生、これについては相応の税を納めなければならないことを、ケルは知っていた——「最後の血の一滴までも、最後の呼吸すらも、底知れぬ深みに溺れつつ。今生きているこの意識を抱いたまま、魂を返却すること。死後にしぶしぶと返すのではなく、一歩また一歩と歩むうちに至福の中で、この世界を抱擁しつつ、去りつつ」。

存在する一切への無条件の帰依という以上は、こうした実存的な危機要素も必然であった。まさにこの過激さ、ケルがありとあらゆる印象にその身を預け、これらについて文学的に手を加えるその過激さは、彼の散文に真の信憑性と、まごうことのない熱狂家の手跡を付与している。⁷⁾

この解説には、「そうとも、私は、自分が熱狂家たちの出であると感じている」との表題がついており、副題が「アルフレート・ケルの旅行記について」となっている。表題の「そうとも、私は、自分が熱狂家たちの出であると感じている」はイタリックの書体になっており、かつ引用の括弧がついている。ケル自身がどこかに書いた言葉かどうかは不明だが、ケル自身のことが言われていることは明らかである。また、ケルの「熱狂」については、ギュンター・リュースレも指摘している。⁸⁾

ケルの熱狂というとき、連想はただちにドゥーゼに行き着く。ケルは、イタリアの女優エレオノーラ・ドゥーゼに一冊の本を捧げている。1904年、ベルリンで出版された『演劇術』⁹⁾がそれである。この本は、「ドゥーゼとは芸術そのものである」との熱狂がケルに書かせた当代の俳優たちに関する評論集である。ケルの熱狂の頂点、それは1902年4月、ドゥーゼのベルリン公演であったろう。

1902年4月、エレオノーラ・ドゥーゼはベルリンにやって来た。三度目のベルリン公演であった。1893年、ズーダーマンの『故郷』でマグダ役をやり、1900年にはダヌンツィオの『ジョコンダ』とイブセンの『ヘッダ・ガーブラー』のタイトル・ロールを、そして今1902年4月、彼女は、1896年以来深い仲になっていたダヌンツィオの新作『フランチェスカ・ダ・リミニ』とゴルドーニの『旅館の女将』を演じるために、ベルリンに姿を現した。

『フランチェスカ・ダ・リミニ』の話は、ダンテの『神曲・地獄編』第5歌に語られている。1275年頃、北イタリアのラヴェンナ城の城主であるグイド・ミノレー・ダ・ポレンタの娘フランチェスカは、隣国の城主で凶暴かつ醜男のジャンチオット・マラテストと政略

結婚をさせられる。ジャンチオットは、結婚の不成立を恐れ、美男の弟パオロを身代わりに立てる。結婚後にこの事実を知ったフランチェスカであるが、パオロへの気持ちは打ち消しがたく、1283-1286年頃、二人は密会しているところをジャンチオットに発見され、フランチェスカとパオロは共に殺されてしまう。ダヌンツィオの劇では、パオロは独り身に設定されているが、実際にはパオロ、フランチェスカそれぞれに家庭があり、子供もいた。『ジョコンダ』など他の多くの作品と同じく、この『フランチェスカ・ダ・リミニ』もダヌンツィオがドゥーゼのために書き下ろし、1901年12月9日、ローマのテアトロ・コスタンツィで初演された。そして1902年4月13日、ケルは『フランチェスカ・ダ・リミニ』について批評を発表した。この批評のおしまいの部分のみ、読んでみよう。

[...] 彼女は美しかった。もちろん、彼女はフランチェスカではなかった。彼女は一人の婦人、現代のドゥーゼだった。そう、彼女は演劇の様式に従わなかった。ジョコンダにしてもこだわるところなく、さらりと、当世風に、恋人の意に背いて。

彼女はただ一度だけフランチェスカだった。二人して読んだ、あの本の場面。彼女は恐ろしくなって、後ずさりする。その指は麻痺したような動きを示した——やがて、あてどなく漂うこととなる、物狂おしく、衰えたる魂。しかしこの場面以外、彼女の所作には豊かな南国が充ちていた。絶大なる文化の最後の優美が。彼女はフランチェスカではなかった。かつて、一度たりともヘッダであったことがないのと同様に。しかし、当時人々は思ったものだ——他の女優なら、もったきちんとヘッダをやるだろう、でも誰もこれ以上すばらしくはやれない、と。そして、今は？ 彼女が本を覗き込み、自分の顔をパオロの顔に近づけると、頬と頬とが互いに触れ合おうとして、そしてついに本当に触れ合ったとき、二人が震えながら離れるとき、そして、ついに——おののきと深遠と破滅への予感と共に、そう、地獄でのさすらいを確信しつつ——くちづけをしている自分たちに気付いたとき、そこには……

読者よ、私が熱狂家とみなされたところで、そんな事は何でもない。そこには、永遠が現れ出たのであった。¹⁰⁾

とり憑かれたケルは、この夜、「女性的なるもの」を通して舞台に「至高天」が現出した、とその批評を結んでいるのである。

2週間後の1902年4月24日、重ねてケルは幸せな夕方を過ごした。同じく場所はベルリンのレッシング劇場。ドゥーゼは旅館の女将ことミランドリーナを演じた。財に窮するフォルリポーポリ公爵は「庇護」を手段として、羽振りのいいアルパフィオリータ伯爵は「プレゼント」の数々を手段として、それぞれミランドリーナのハートを射止めようと夢中になっている。ミランドリーナの父が死の床にあって、彼女の夫に、と遺言した召使のファブリッチョもミランドリーナに首っ丈。しかし宿屋に逗留している騎士リパフラッタは、大の女嫌い。そうした「うすのろ」たちの「馬鹿騒ぎ」を冷ややかに笑う一方で、ミランドリーナにはそっけなさを通り越し、見下すような態度をとる。これに怒ったミランドリーナのリパフラッタへの仕返しのため、ミランドリーナがファブリッチョと結ばれてハッピーエンドに終わる顛末が愉快なこの芝居を見たケルは、2日後に批評を発表した。書き出しと、結びの文章のみ覗いてみよう。

外国からやって来た旅芸人一座を見ただけでは、その国の俳優一般について決定的なと

ころは理解できない。一度もイタリアに行ったことがない者、真夏の夕べに田舎演劇を見たことのない者、その真ん中に立つ一人の男——この国の、この民族の栄光がその頭部を照らしている男——そうした男を見たことがない者は、イタリアの俳優について何も言えない。ドイツ語圏の外の俳優術が民族ごとに区別が出来るということ、この点については議論の余地はない。フランスは偉大なるテクニクの持ち主を抱えている。イタリアは天才を抱えている。この差は正確にレジャーヌとドゥーゼとの差である。正確に。彼方には輝かしい名声がある。しかし此方には永遠がある。フランスには奇跡と言ってよいほどすばらしい存在があり、イタリアには奇跡が存在する。

[…]

存在するものに備わっている永遠性のゆえに、我々は今も、彼女をかつてのままに目の当たりにしている。そして彼女にいつか死が訪れたときには、我々は言うだろう「我々は彼女を見た」と。¹¹⁾

ほんの一部を読んだだけでも、思わず、感心させられるこの文章、この調子には、若きムージルも強く惹かれ、それがきっかけで数年後ムージルは『テルレス』を携え、ケルのもとを訪問することになる。この間の事情については別の稿ですでに言及したとおりである。

ケルの熱狂ぶりに話を戻そう。言葉を尽くしてこうまでケルに絶賛されたドゥーゼであるが、1859年生まれ彼女の彼女はこのとき43歳、このベルリン公演に続いてアメリカでダヌンツィオの作品を演じた後、翌1903年にドゥーゼはダヌンツィオとその8年越しの関係を終わらせた。ケルはそうした冷却に向かう二人の関係についても知っていたのかもしれない。このときの批評のあちこちに、ドゥーゼの急激な変わりようにも触れている。そして、それゆえに彼女の「永遠」をことさらに、またも「熱狂的に」言わずにはいられなかったのかもしれない。

ドゥーゼに対するケルの「熱狂」とはこうしたものであった。

ところでハールマンがケルを「熱狂家」とみる際に、ムージルの『熱狂家たち』が念頭にあったことは間違いがない。現在、ケルを読むのにただ一冊だけ本をあげるとしたら、あるいはアルゴン出版の「アルフレート・ケル、人生と作品」¹²⁾が適当かもしれない。彼の生い立ち、批評を中心に、もちろん旅行記をも含む仕事全般、そして亡命生活と反ナチへの抵抗の姿勢が分かるアンソロジーであり、豊富な写真もいい。それぞれの章の最初に記されている簡潔な解説もいい。ハールマンはこの本の前書きを、クラウス・ジーベンハールと一緒に書いている。5ページからなるこの前書きは、ムージルのエッセイからの比較的長い引用で始められ、同じくこの前書きの結びもムージルのエッセイからの引用で終わっている。

「ケルの批評と他のすべての人のそれとは20歩遠く離れたところからでも区別できる。こんなことができるのは、テキストにローマ数字が付けられて、例の小さな包みに分包されているからである。造形芸術においてポスターの様式が絵画のそれと袂を分かつずと以前から、そして映画の様式が演劇上演のそれから脱する相当以前の時代に、去勢されたエッセイ、すなわち新聞によって提供される種々の不都合な状況の中で発展を阻害されることとなったくだんの儀式ばった文章芸術は、より表現力に富み、道しるべのように印象的な表現法に移行するべくその道が開かれ、そして実現をみた」(P, 1180)

この本の序はこの引用をもって、すなわち、ムージルはケル60歳の誕生日に寄せたこのオマージュにより、時代の精神人物を、深い気持ちを込めて、端正で美しい文章により分析している、と始めている。そして、

「ケルを読んでください！ 彼の作品を読んでください。手ごろな版に収められています。彼の横に腰をおろしてください。できれば彼の立場で新しいことを考えてください。そうすればお分かりになることでしょう、すでに1891年に他の人の名前で扱われた事柄が、今もおあなた方に重要なのだと」(P, 1182f.)

と、出版されたばかりの本へ我々の注意を促し、序文を結んでいる。ムージルによってこのように理解された意義深いケル、という紹介であろう。ムージルを高く評価したケル、その評価能力において秀でていたケル——そう確信してのケルに関する説明がこの前書きの骨子である。

この前書きの日付は1987年12月であり、先の旅行記の解説「そうとも、私は、自分が熱狂家たちの出であると感じている」が書かれた日付は1989年8月と記されている。同一の編者が、とはつまりヘルマン・ハールマンが、編んだ2冊の本のうち、最初の本について、ムージルが推賞している文筆家こそはこのケルです、と言ったその次の本の解説で、「熱狂家」と来れば、この熱狂家がムージル戯曲『熱狂家たち』を踏まえたものと考えて間違いないであろう。

ムージルが『熱狂家たち』をケルに贈本した際の、手紙の一節が思い出される。ムージルがドラマ『熱狂家たち』でケルに読み取ってもらおうと考えたその「意図」「企て」とは何であったのか、という疑問にもう一度立ち戻ってみたい。

コリーノの推測どおりだとすると、要するにムージルはケルのヴェニス旅行記を読んでいたということである。先に、ヴェネチアはムージルにとっても特別の町であるということ述べた。マルタとの結婚問題があった時期、1910年9月の数週間に亘るリド滞在の折、ムージルは日記に「この物語（『愛の完成』）の一部はヴェネチアを舞台にしようと思う」と書いている（TI, 230）。この計画は実行には移されなかったが、『特性のない男』の草稿の一部に転用された。¹³⁾この草稿は現在の版に収められている（MoE, 1764ff.）。

そして1912年、ケルのこのエッセイを読んで、ムージルは少なからず心が騒いだに違いない。ケルのエッセイで強調されている「体験された事実の描写」、「夜の部分」……。これはケルがかつてムージルの『テルレス』に認めて、絶賛した点である。人には、独特に「夜の部分」があること、「体験」があること、そしてこれは「詩人によって描かれてよい」ものだ、そうケルは書いた。そして、こうした認識はもともとケルの本質として、ケル自身にも存在していたということ、この点を、ケルのエッセイを読んだムージルはあらためて実感したに違いない。いやそれ以上に、ケルのヴェネチアでのラケエレ嬢との体験は、ケルがムージルの『テルレス』を知って以後、より鮮やかな形象としてケルに獲得されることになったのかもしれない——ムージルはこのようにも思ったのかもしれない。そうであるなら、少なくともムージルの方としてはあらためて自分とケルの結びつき、同じ魂の持ち主としての「帰属感情」（TI, 912）を呼び覚まされたことであろう。1921年9月6日、ムージルは『熱狂家たち』をケルに郵送した（BI, 238）。その年も師走に入った12月6日、ムージルは再びケルに手紙を書いた（BI, 248）。この手紙で、ムージルは3ヶ月も前に届けた

『熱狂家たち』が、ケルにまだ読まれていないことに言及し、そうであればこの戯曲に込めた自分の意図も甲斐のないものであった、と落胆をあらわにしている。具体的に何を指すのかについては、別の稿でも考察したが、『熱狂家たち』は熱狂家ケルに対して書かれたものだということを、ムージルは一番に言いたかったのかも知れない。

ヴェネチア女性ラケエレ嬢へのケルの情熱のほとばしりには、ヴェネチアに程近い町キオッジア出身のドゥーゼへの思いが重なっていた。身代わりというのではない。ラケエレ嬢について語り、ヴェネチア女性たちというとき、ケルはドゥーゼへの思いを重ね真にヴェニスを知った。ムージルにはこのことが理解できた。繰り返しになるが、ムージルは後年の覚え書きで、ケルを知ったそもそものきっかけは先に触れた彼の『俳優術』だったと述べている (TI, 912)。

『特性のない男』が発表された1930年10月、ムージルの「熱狂家たちのスキャンダル」(1929年4月)で微妙な関係に陥った二人であったが、ヴェネチア女性のラケエルすなわちウィーンの小間使いラヘルは、二人の熱狂家たちの間を取り持ったのかもしれない。

IV パリ作家会議 亡命者への意識と文学の創作

ムージルとケルは1929年以降一度だけ顔を合わせている。見かけた、という程度かもしれない。一言挨拶を交わしたかもしれない。あるいは、二人とも気付かずじまいだったかもしれない。正確にいうならば、二人は同じ会議に出席している。ムージルは講演をする義務があり、ケルは自らの生存に関わる問題が討議される会議であった。1935年6月21日から25日にかけて、パリで開かれた「第1回文化擁護のための国際作家会議」がそれである。

大勢の作家が出席した。ドイツ語作家ではエーゴン・エルヴィン・キッシュ、アルフレート・ケル、ベルトルト・ブレヒト、マックス・ブロート、クラウス・マン、ヨハネス・ベツヒャー、アンナ・ゼーガース、ハインリヒ・マン、ヘルマン・ブロッホ、リオン・フォイヒトヴァンガー、エルンスト・トラウ、そしてムージル等々であり、フランス人作家ではアンドレ・ジッド、アンドレ・マルロー、アンリ・バルビュス等、その他当時イタリアに在住していたオルダス・ハックスリーも来ていた。¹⁴⁾

ケルとムージルということでは今回もまた、ムージルが公衆の面前で、この度は大勢の著名な作家が居並ぶ前で、大勢の聴衆の前で、スキャンダルを引き起こしてしまった、ということに尽きる。つまり、このパリでの新たなスキャンダルは、ムージルとケルがお互い気まずい関係に陥ってしまうきっかけとなった1929年の『熱狂家たち』をめぐるスキャンダルに瓜二つであった、ということである。ムージルの講演についてはムージル全集に二つの稿が載せられているが、二つのうち講演内容の特徴がよく表れている方を、以下で見ることにしたい。

【パリの講演】

【文化擁護のための国際作家会議において】

「1935年7月」

【校正済み清書】

多くの問題点が、あらかじめ会議執行委員会の方々の周到な準備を経て、提出されてお

りました。そしてそれらの問題点のうちには私自身、過去に考えをめぐらせたものも含まれているのですが、しかしながら、それらの問題点から一つを取り上げて、新たに考察し直し、長い時間をかけて綿密に検討を加えるという方法によってこのたびの報告を行うということは、特別な状況が重なったことにより不可能でありましたことを、あらかじめお断りいたしておきます。

文学、そしてこれをも包括し、幾分か不確かなところのある何ものか、すなわち文化と呼ばれているものが、引き続き自分自身の問題であり、かつもっとも深く心を寄せる対象であると考えた作家や詩人。そうした作家や詩人が、今まさにこの対象をおびやかしている大なる危機について話し合うために、初めて一堂に会したこと、この点こそがこの会議の大きな意義である、自らを慰めるばかりであります。こうした催しの最初の時間には、種々様々ある意見の多様さについて相互に理解を得ること以上に、何らかの成果を想像することは難しかろうということ、そしてそうであるならば、とりあえずは「完成原稿」ではなく、草稿のプランと概略が大事であろう、と考えた次第です。

お話し申しあげようと考えた内容のプランと概略（討議の様々な要請の大規模なることを念頭におき、いわば、最小の空間に凝縮させることを心掛けた結果）は、その本質において非政治的である、ということです。この点については、前もって心からお詫びを申し上げる次第です。その理由として一つは、政治によって加えられた筆舌に尽くしがたい苦しみと不当な辱めが現に存在している故であり、もう一つには、人間は政治的要請から逃げてはいけなと発言する人たちがおいでになるからであります。私は長いこと政治から身を遠ざけてきました。政治には向いていないと感じていたからであります。政治はすべての人に関係があるところのご異議については、私には理解の及ばないところであります。衛生学もまたすべての人間に関係があります。しかしながら、私は衛生学について公に発言したことはありません。衛生学者になれる才能がないと分かっているからであり、その点では政治家についても、地理学者についても同じです。

さて、これから政治と文化の境界、そして文化供給者の状況、特に詩人の状況に話が及んでいくわけですが、覇気のある一人の臣民を想定してお話します。私自身としては、自分のもっとも身近な例としてドイツ人の詩人を念頭に置いているわけですが、こうした臣民にしてもまた、ドイツ国民の政治面の代表に対し、問題がなくもない状況に陥っているのです。目下はご存知の通り、その政治的代表は臣民に十全の服従を要求しています。ドイツ人の祖父たちには、どのような時にも免除されてきた言葉を使うならば、「完全なる」服従というものなのですが、これが現在では求められているのです。

この服従はしかしながら、彼がドイツ帝国とは違う国家に属している場合には、禁じられていることは勿論のこと、そればかりではなく彼に対しては、特別な文化的服従、あるいは順応ということが要求されるのです。例えばわが故郷オーストリアは詩人たちに対し、彼らがオーストリアの詩人であることを期待しているのです。詩人であり、かつオーストリア人ではなく、特別な香りを放つ詩人というものを期待しています。そしてまた、オーストリアの詩人はドイツの詩人とは何時もどこかが異なっていた、ということ了我々に証明してみせる文化史設計者といった方々も存在しています。こうした事情は即座に、オーストリアの詩人という概念は、詩を作るオーストリア人の概念の一段下に位置するものとの考えを生み出すに至りました。

他の国々においても類似的状況が生じています。そして、本当に様々存在する祖国の、

それぞれの政治的、社会的な目的と考えるの求めるところは、文化概念の上位に位置するものとなっているわけです。

以上述べた事柄すべてから疑問が一つ生じてくるのですが、この疑問は様々な形式をとることができます。国民的という問題、そして詩人というものに限定すると、たとえばこういう形式です——詩人という（いわば、余計な何物かとしての）概念は、ロシア人の、ドイツ人の、イギリス人等々の詩人というものから、ロシア人、ドイツ人、イギリス人等々を差し引いたものなのか、あるいは詩人という概念は、こうしたものとは別のあれこれの方法で獲得された概念であり、かつ上位の位置を占める概念で、これが国民という枠組みで特殊化したものであるのかどうか？ 私の考えでは、これについては様々な理由から選択の余地はなく、偏見を抱かずに熟考していただけますならば、後者を答えとして選び取るについては少なからぬ人々が躊躇するでありましょう。

その場合にまた、詩人という言葉の代わりに、文化という言葉を用いても許されるであろうことは勿論であり、国民的なものを特徴づける言葉に代えて、政治的な言葉、すなわちプロレタリア的だとかブルジョア的だとかファシスト的といった言葉を用いても、同じことが考えられるわけです。

こうした意見が同調者を見出すことができるかどうか、私にはわかりません。しかしながらこれは、思考方法から言って必然的な解答なのであり、結果としては有益であり、かつ誰をも侵害するものではないのです。

熟慮ということから、偏見を抱かない姿勢が失われる結果を招いたのには、二つの理由があります。包括的な理由としては、我々の時代の歴史は激化した集産主義に向かって発展してきたことを、その原因とするものがあります。私が殊更に言い立てることでありませんが、この集産主義はその形式ということでは何とそれぞれに異なっていることでしょう。その歴史的な瞬間は、そこそこで何と異なっていたでしょう。その未来の価値について何と異なった判断が下されることでしょう。かつてないほどに地球の大地の上、地球に間近いところを漂う絶滅の天使は、一切の予測を許してはくれません。

さて、計算のつかないことは無視すればよいと考えることにして、そうすると確からしさということでは、集産主義に向かっての様々な前進的發展が世界の像を決定するのでしょう。この発展に賛成する人々の数は増大し続けています。つまり、これまでの団結のみが、その成果の頂点として維持、保存されるだろう点はそれとして、人々はさらにより一層強力な結びつきを要求しています。

こうした結びつきというものは当然のことながら、文化の領域をも包括するものであり、そのことはすでに今日、現実のものとなっているわけです。この抱擁は文化を台無しにしているのでしょうか、あるいは豊かにしているのでしょうか？ 政治家というものは華麗なる文化については自らの政治による自然な戦利品とみなすのが常であり、かつては女性が勝者の腕に転がり込んだことと事情は同じです。これに対して私は、文化のその華麗な側面については、女性の自己防御に備わっている高貴な巧みの技が是非とも必要であろうということ、この点を申し上げたいのです。

歴史的な大変革の中で、自分自身が変革される対象になるという名誉を思うとき私の全身において、文字通りに身の毛がよだつことがままあります。そのときには、一切は政治の干渉と侵害にはかならないとの単純で狭小な考えが、一時に胸に湧いてきます。帝国主義的決戦、ブルジョワジーの死戦、プロレタリアによる国家形式の苦い青春、何で

あれこうしたもののすべてはそれぞれに脅威を実感しており、その結果ありとあらゆる手段を動員しています。

召集されたメンバーには文化も加わっています。

そして国家が、階級が、民族が、人種が、そしてキリスト教が我々に向かって苦情を申し立てるだけにとどまらず、そうしたもののすべてが自ら芸術家や学者の中へ入り込んできています。政治は、(ドイツ語のことわざいわく) 苦しいときの神頼みを教えただけでなく、文学、絵画の創作、そして哲学をも教えるというわけです。少なくとも彼らは不動の忍耐で、我々がいかに為すべきかを教えてくれているわけです。

政治は今日、目標とするものを文化の下で手に入れるのではなく、自ら運んできて、分配してくれているわけです。

ところで我々は、流れに逆らって泳ごうというのでしょうか、それとも流れに乗って泳ごうというのでしょうか？ 泳ぐとは、成り行きに任せるということではありません。なるほど我々は、何らかの制限がありうる全体権利と、個人の果たすべき義務とが互いに調和するものだと感じてはいるのですが、聖職者が神に対して持つと同様の義務をも感じているのです。そしてそうした聖職者と同じように、我々は専門家として門外漢の間を動いているわけです。しかし私たちは神秘や啓示を持たずにやっていかねばならないのであり、我々に付託されている義務について、その根拠をどこに求めるべきか、その義務はどの範囲にまで及ぶものなのか、そして我々はこれをどのように実行しようと考えているのか、これらについての疑問は簡単には解けないものなのです。結局のところこうした疑問は、我々はいったい何者なのかという疑問に行き着くのであり、この疑問を我々自身、あえて自らに発することはないと考えるにしても、必ずや他者から我々に向けての問いかけは行われるのであり、かつ、その場合の問いかけにいつも親切な優しさがお供をしているかという、必ずしもそうとは限りません。

文化の奉仕者、救済者、供給者！ この会議の枠組みの中では、我々はこのような外観を有しているに違いありません。こうしたイメージを持つことは、何か特定の文化を、それが既存のものであれ、この先に招来されるものであれ、思い浮かべてみるならば、容易なことです。しかしながら、あれやこれやの不必要と思われるもの、望まれていないものが、それでもなお文化であるかどうか、このことが問題となっている場合に、文化とは何でしょうか？ この疑問はあるいは、6つの壁はどのような状況下であれば一つの部屋を構成することになるのか、という疑問のようなものです。私たちはただ単に、そうした壁の内部にいて、家具調度の間に存在する一定の、かつ程度の差こそあれそれぞれに独立した繋がりの中で、ただ習慣的に散らかしたり、片付けたりしているにすぎません！ 実際に我々は、文化はどのようにして発生し、破滅していくのかについて、ほとんど知識を持ち合わせていません。

例えばですが——この例は決して偶然に思いついたものではありません——平和を愛する心も文化の一部を構成しているのでしょうか？ 文化を愛する人は、平和を愛します。というのも戦争中の民族(同じく、内部で激しい階層変化が続いている民族)が、文化の生産に何らの寄与も果たさない点では、生命の危機に瀕している個人の場合と事情は同じです。つまりは、ある種の自然な平和主義といったものが存在するわけですが、同様に、生まれつきの非政治的性格というものも存在し、この性格の持ち主にとって文化の仕事が重大な意義を持つという場合があるのです。これについてはニーチェが主張

しており、政治の力が強い時代と、文化が重要視される時代は一致することがないので。その他、戦争は個々具体的な点においても非難されるべき行為から成り立っているものであることについては、今は言及を差し控させていただきます。

勝利の後ということでは別の事情があります。全般的に言って、勝利を収めた国々は偉大な文化を生み出してきました。その理由として言われることは、それらの国々は戦争を通じて豊かになったからである、というものです。この結果、戦争遂行の価値を説明するのに、非戦の長所にその根拠を求めるという奇妙なパラドックスが生まれることになります。しかしながらこのようにも言われることもあります。彼らは強かったから、と。この場合には、文化はいわば戦争の心理的な報酬として、あるいはその心優しい姉妹として登場することになります。こうした思考過程を説いているもの、これが周知の文化哲学です。

この文化哲学と、そして本当に大勢の人々がヒロイズムについて哲学的な考察を巡らすことをせず、やはりヒロイズムを恐れているという事実から、「鍛錬の世界観」への近道を通じることとなります。この世界観は、平和ならびに仕事への「自然の」愛情をおおよそのところ非常に手荒く扱うこと、すなわち猟師が猟犬をしつける時の態度と同じです。

一言で言うならば、文化に関しては（そして感情に関してもまた）他のもので代替されないような公理なるものは存在せず、それゆえに新たな土台があれば、新たな文化が可能となるのです。決定的な点は、全体は関連の中にあるということであり、事実、ある人間の主義や行動を個々に取り上げてみても、その人物が愚者であるのか、それとも天才なのか、あるいは生まれつきの犯罪者なのかは、言い当てることはできないのです。

この他に——遺稿の断章の中に——はるか先を見通した恐ろしいニーチェの覚書があります（この偉大な分析家の言葉を引用するのはこれで二度目になりますが、それというのも彼は偉大な予言者でもあったためです）。その覚書とはこうです——「道徳的理想の勝利が非道徳的な手段、すなわち暴力、虚言、中傷、不正によって勝ち得られる事実は、あらゆる勝利と変わりがない」。

我々が、このまさに新しい男の粗野で本末転倒した言動に腹を立てるだけではなく、この個人的な腹立ちと創造史の原則とを混同するとき、我々はそのたびに、偉大な真理を内容とするこの観察に造反しているわけであります。習慣的なことを必然的なものと考ええることは、当然ありうることなのです。

権威主義的な国家形式に対する嫌悪の一部は、なるほど単に議会制民主主義国家への慣れ親しみに起因するものなのでしょう。この議会制民主主義国家は、少々くたびれて、しかしながら着心地のよくなった背広に対して覚えるのと同じ愛着を呼び醒ましてくれます。それは文化に対して大きな自由を与えてくれます。しかしながら同じ程度の自由を、国家に寄生する虫たちにも認めるわけです。これらの虫たちに発達能力がないとは申しません。が、長所、短所様々あっても、文化の営みと虫たちのそれとを同列に置くことは、決して正しいことではありません。

文化はいかなる政治的形式にも拘束されていません。文化はすべての政治形式から固有の刺激と抑制を受けます。なるほど、文化の担い手たちの各々は自分が抱いている要求の分け前を考慮して、ある特定の政治形式について、これが自分に一番気に入っているとか、これが将来もっとも有望であるとかの決定を下すことはあります。しかし、多か

れ少なかれ彼はこのことを私人としてやっているわけです（すくなくとも私は自分のことではそうに感じています）。彼の本来的な使命の遂行に際しては、彼自身そうした政治形式に対して、程度の差こそあれ自己を防衛する義務があるでしょう。

その際に、彼は伝承の理想から逃れることはできません。というのも、伝承の理想は、全体の発展によりその形を変えることを、彼自身理解しているからです。彼には、個人の、言ってみれば完全な未来の文化プログラムを作成することはできないのです。彼はこの場合にソクラテスの博識を持っており、この博識が、自分は一切を知っているという自惚れを彼に許さないからです。

もう一度申さねばなりません。我々にとって文化とは、何か伝承されたもの、体験されたもの、定義可能なイメージというよりは、我々の中を、我々の間を生きつづける意志のことなのです。文化とは仕事と活動の総体のことであり、そうした仕事や活動は果てしなく数え上げることができます。例えば誰かある人がおよそ厳密とはいえないこの認識の代わりに、一貫した思考による、確固たる認識をもたらしてくれる場合、その人はまた一つ仕事を多く成し遂げたというだけのことです。

しかしながら、これは弱点の根拠を言っているものではありません。概念ではなく、人間の能力を手に入れること、このことこそが肝要な点です。そしてまた人は、そうした人間存在やその発展に関しては、我々が文化の最終目的に関する知識を欠いているのと同様、何も知識を持つてはいないのです。

こういうわけで、例えば文化が超国民的なものではないとしても、超時間的な何ものであることは疑いのないところです。ある一つの民族について考えてみましょう。没落し中断があった後、再び穂が接がれる際には、大きな時間的隔たりが飛び越えられるわけですが、このことは特に珍しいことではありません。ここから得られる結論は、文化に奉仕する人々にとって、自己を余すところなく国民的文化の現況と同一視することは、厳禁ということです。

そしてまた、文化が常に、^{ナチオナル・インターナショナル}国民的な性格を帯びているのと少なくとも同じ程度には、国際的であったことも確かです。芸術と学問の歴史はこのことを示す唯一の例です。未開人の文化ですら、こうした事実を提示しています。

特にその最上層の人々の間では、文化は超国民的關係にあふれたものとなっています。天才の配分は、他の稀有な存在の出現と同様に行われているわけです。

また、文化の伝承はただ単に手から手へと手渡されるものではなく、さしあたっては説明のつかない奇妙ななりゆきがある種の役目を果たしています。すなわち、創造的な人間は過去のもの（あるいは他の場所からやってきたもの）を引き継ぐというのではなく、彼らの中で何かが新しく生まれ、そうしたものを通して太古の歴史が繰り返し新たに活性化され、個々人の変更が加えられるのです。

これに加えて我々は、こうした成り行きの担い手は個々の人間であることを知っています。共同体の果たす役目は大変に重要です。しかしその役割を極度に強調するときですら、個人こそが文化を作る道具であることを認めるべきでしょう。そうしてこそ、文化生成のための、周知の大規模な一連の諸条件、すなわち個人的創造に関連するすべての

条件が整うことになるのです。

知識、自由——政治概念としてではなく心理的な概念として、大胆さ、精神の不安、探求欲、率直さ、責任感——、こうした特性がすべての人に支持されるのであれば、それらが優れた才能の持ち主の中に存在している場合にも、決して表面には出てこないのです。

我々は、偉大な精神の持ち主を形成している特性の領域を、おおよそにおいて記述することができます。そのような精神は、豊かであり、精密で、抽象能力にすぐれ、明晰で、散漫なところがなく、しかし運動性がある等々。その人は豊富な経験と、最小値の偏見を持っているに違いないのです。そしてその他、名前を挙げることのできる特性をも豊かに持っており、また当然のことながらそうした特性は、同時に現出している必要はないものの、間違いが埋め合わされる程度には目に見える形で表れているであります。

真実を愛する心も備わっているに違いありません。これについては特に言及しておきたいと思います。というのも現代においては、この真実への愛は特に大きいとは言えず、また、我々が文化と名付けているものは、なるほど直接に真実の概念を試金石とするものではないものの、いかなる文化も真実に対する斜めの関係の上には成立し得ないからであります。

私が結論のないままに話を終えることは、私のささやかな話の内容に沿うものであります。私としては、世界をその魂の影響を通して改良することが可能かどうかについては、疑わしく思っております。出来事の推進力は、どこか野蛮な性質を帯びているなにかなのです。しかし我々は、精神が自分自身について提出すべき要請を、思い出しねばなりません。我々はそうした要請を作成し、権力を委託されている、あるいは委託されていると思っている人々に、我々の能力を使って、そのことを強く主張するべきであります。(PI, 1259–1265)

ムージルはこの大きな国際会議という場で、おおよそ以上の話をした。すなわち、政治に関心のない一人の人間について。なぜ文学に携わるのかについて。文学の無価値について。人類の進歩への不信について。表面の美しさと、内実の醜さとのパラドックスについて。全体を通してムージルが鮮明に主張していることは、人は一人で行動すること、集団のもたらす一切のものに疑いを持つこと、そしてこうした考え方が広く理解され、受け入れられること、である。

ムージルのこの講演は不評であった。¹⁵⁾その内容がこの会議で期待されている「講演」とずれがあること、それがスキャンダルの一の原因であるということとはできる。しかし、内容あるいは主張ということばかりが原因ではない。その調子についての反感があったからこそ、講演の後にもマスコミで激しく叩かれもしたに違いない。すなわち、明確な答えを得ることが絶望的とも思われる問題の提示、それでいながらその主張と、時に盛り込まれる比喻との遥かなる高低差。そして、イロニー。

これについては、ムージル自身、この会議の性質、あるいは「色合い」を十分に理解していなかった節がある。いづれにしてもムージル自身の責任は免れないところではあるが、結果は彼の不幸であった。

そして、ドタバタもこれに輪をかけた。ムージルの講演はこの大きな会議の中でも目玉

の一つと見る向きもあった。¹⁶⁾ ムージルは会議が開かれた直後に講演することがあらかじめ決まっていた。十分な用意ができていなかったムージルは、急遽、講演の順序を入れ換えてくれるようにと主催者側に申し入れをしたが、これは聞き入れられなかった。そのことが悪い状況を招いてしまった。ムージルが講演を始めたときに、ドイツ語を解しない聴衆、あるいはそうしたドイツ人以外の作家に講演要旨が配布された。この時にムージルのものではなく他の講演者の資料が間違って配布されてしまった。会場の聴衆に与える印象ということでは完全に失敗であった。もちろん資料配布の誤りだけが原因ではない。

ケルはこのムージルの講演を聴いたであろう。亡命者への無理解に腹立ちを覚えたことであろう。時代状況への無関心ぶりにも、同じ気持ちを抱いたことであろう。それは多かれ少なかれ、居合わせた他の聞き手も同じであった。キッシュ、ボード・ウーゼらはこの後、雑誌論文でムージルを弾劾したし、一部の新聞も激しい調子でムージルを叩いた。¹⁷⁾

ケルはどうであったろう。ケルはムージルに関し、最も近い過去に全く同じ経験をしたことを、半ば驚きと、半ば理解の気持ちで、思い出したかもしれない。失敗に終わった『熱狂家たち』の上演の顛末について。

その他にケルは、この講演に、ムージルからケルへ宛てられた「挨拶」のいくつかを聞き取ったかもしれない。今の場合には「自己推薦状」とはならない。ケルは半ばペンを取り上げられた状態に陥っていたのであるから。聞き取った挨拶の一つは、講演の開始すぐの言葉、原稿では但し書きになっている部分——（討議の様々な要請の大規模なることを念頭におき、いわば、最小の空間に凝縮させることを心掛けた結果）——である。原稿全体の印象もそうであるが、ここでムージルが言っていることは、「私の今からの話は、アルフレート・ケルの批評のスタイルを取っています」と言えば、より直接的な表現であったろうが、パリではその効果はどうであったろうか。「挨拶」の二つ目は、この言及の直後のところでムージルは「政治によって加えられた筆舌に尽くしがたい苦しみと不当な辱めが現に存在している故であり」と、亡命した人々への共感を言葉にしている。三つ目の「挨拶」はこの講演全体が、一切の妥協を排したムージル流によって貫かれている点である。後年にスイスへ亡命した時期の覚え書きで、ムージルはこう回想している——「テルレスが本になった頃かあるいはもっと後の時期か、いずれにしてもケルが私のことで世話を焼いてくれた頃のことがだが、彼がこう言ってくれたことがある、自分流といったもので書きなさいと。彼が言うには、フランス人はそのことを *se faire la main* こつを身につけると表現するとか」（TI, 922）。今、フランスの土地で30年前のこのやりとりを、このフランス語を、ケルは思い出すことができたのだろうか？ ムージルは、この言葉を、このフランス語を、この度の講演原稿を書くときに念頭に置いていたのだろうか？ もとより分かる由もない。しかし、講演全体を貫くムージルの自分流については、ケルにも、ケルこそは十分に、いや十二分に理解できたに違いない。ムージルの人生におきた一番のスクランダル——『熱狂家たち』上演、ケルはその細部、いやその裏側までも熟知していた。このパリ会議の場に居合わせたケル、ドイツ語とフランス語の二つの言葉に特別な愛情を抱き、その愛情を能力に換えて身に付けていたケル。彼は、ムージルの講演の意義、その講演内容におけるムージルの意図、そして居合わせる聴衆が抱いた講演への印象と反応、こうしたものを、ケルは自らの身に起きたことのように、正確にそしてつぶさに理解し、感じとったにちがいない。ケルは失敗に終わった『熱狂家たち』を見たその翌日に批評を書いた——

「極端に過ぎるものを出してきた……」¹⁸⁾。今、この講演について批評を書く機会が与えられたならば、ケルは当時の原稿を引っ張り出してきたことだろう。そしてこう書いたに違いない——「極端に過ぎるものを出してきた……」と。

V 再び、ケルの弔辞

ケルはムージルに何を見ていたのか。再びケルの弔辞を読んでみよう。

「ムージルと私は『テルレス』のすべての行について、細部に互って、手書き原稿の段階から、[……] 一緒になって仕上げに取り組んだ」

二人の関係を考えると、二人で過ごしたこの時間は、二人にとって至福の時であり、意義のある時間であった。ケルとの出会いは少なくともムージルにとって、彼に二つあった人生最高の思い出の、そのうちの一つとして記憶されることになった (TI, S.912)。

「……ムージルは大人と子供が混在する人物であり続けた。眼前に存在する理解しがたい事柄を、食い入るように、絶望的とも言える様子で——しかしながら、かぶりを振るそのしぐさから分かるように、なおも明るさを失わずに、その事柄を見つめるのであった」

ムージルが生涯に互り、解き難い問題を追及しつづけたこと、その徹底ぶりと絶望的な営みは、ケルを驚かせ、そして時に彼をとまどわせた。

「女性も魚も、真ん中のところを頂くに限る！」と——詩人については、必ずしもこうは言えない。

ムージルの「真ん中のところ」(すなわち『テルレス』の後)は、彼の極上部位ではなかった。

ムージルへの愛……。その理由は、ムージルが殴り書きの類いを一切することなく、文章を書いたから……。それだけであろうか？ そして、ケルのこの比喩:「女性も魚も……」。追悼演説で。人の死を悼み、生前を偲ぶ場で、この比喩。その高低差。二人の親縁性。

「抜きん出たものは、1930年に再びやってきた、『特性のない男』。[……] 今、彼の体を離れた自我は、生き続ける」

ケルはその昔、若きムージルの『テルレス』を批評したときに書いた。「これは、残る」と。ケルの慧眼。そして今、1942年、ケルは言う。「『特性のない男』[……]、その自我は生き続ける」と。ケルの慧眼……!? 遅れてやって来たケルの慧眼……。

「そう、彼は行ってしまった。62歳——あの時の、小さな工業学校の学生が。不思議だ

無常を言った言葉が思い出される、かのホーフマンスタールの言葉。『エレクトラ』の中の人物が言う、『流れて行くもの、それは川のことでない——それは私、この私のこと』。

ムージルとケル。1905年に出会い、今1942年。38年の時は流れ、そして今、ムージルはいない。ケルはかつて見たホーフマンスタールの芝居『エレクトラ』を思い出す。一つの思

い、極端に過ぎる思い、を胸に抱き、決してこの考えを捨て去ろうとしないエレクトラ、このエレクトラに妹クリソテミスは世の無常、移ろいの常を説き、そして姉のその憑かれたような思いを忘却するよう、抑制するように、と促す。ケルは言う、「その熱狂において気高い」¹⁹⁾エレクトラ、と。死んだとばかり思っていた弟オレストがエレクトラの前に姿を現した。今こそ、オレストを頼りに凄惨な復讐を実行に移そうとするエレクトラ……。舞台を見たケルは書く。

ホーフマンスタールもまた、副次的なもののすべてを脇へ追いやり、常に同じ性格的特徴を積み重ねることにより、一人の人物の内実を表現する。そして彼のエレクトラが、この唯一の感情の恍惚を、忘れえぬ言葉にして発するとき、彼女はその熱狂において気高い。

幸いなる者は、自分のすべきことを果たそうとする者のみ、
そして、かの者に手を触れることが出来る者
かの者のために大地から斧を掘り出す者
かの者に松明をかざしてやる者
かの者のために扉を押し開けてやる者も、また幸いなる者
幸いなる者は、扉から内部の様子を窺い知る者

そしてケルは言う、妹クリソテミスが発する「この上ない人間性の発露」の言葉²⁰⁾、と。

ここには、反キリストの思想があるのかもしれない。幸いなる者は、自分のすべきことを果たそうとする者、幸いなる者は、かの者に手を触れることが出来る者、かの者のために大地から斧を掘り出す者——幸いなる者、幸いなる者、幸いなる者！

かつて象徴派の芸術は往々にして（ワーグナーになぞらえて言うなら）——別れの場面ということは別にして——「魔の炎」であった。しかしながら今ここには、血にまみれた絵画像は別にして、私の魂に触れるいくつもの性格的特徴がある。絵画的なものは流れ去る。そのとき思い出されるものは、弟の帰還に際してエレクトラが流した涙の静かな恥じらいであり、これこそが人を捉える。殺害に手を貸したクリテムネストラは、行為の前のこと、行為の後のことについてははっきりと自覚があった。が、その瞬間は何も分からなくなっていた——人を駆り立てる無意識の冷たい感情の中に、人間らしさを伴った戦慄というものが存在している。フランシス・ベーコン卿に宛てたホーフマンスタールの「手紙」に鬱々としたためられていたあの眩暈の概念が思い出される。しかしながら、この上ない人間性の発露、それこそはクリソテミスの言葉である。

私はもう若くはないってことが、どうしても現実のことと思えない
本当にすべてはどこへいってしまったのしら、一体どこへ？
流れて行くもの、それは川のことでない
糸巻きから休みなく出て行くもの
それは糸ではなくこの私、この私のこと

狂気に憑かれたようなエレクトラに向かって、妹クリソテミスが発するこの上ない人間性の発露をケルはこの弔辞に引用している。

しかしながら、今ここでケルに思い出された劇はソフォクレスではなかった。コロスと

エレクトラとの対話の場面ではなかった。ホーフマンスタールの劇の最後——そのクリソテミスも、エレクトラの熱狂が成就された今は、内心をつき上げるように湧いてくる喜びを隠さない。エレクトラの狂気、やがてこの狂気に気持ちを添わせるクリソテミス……。そして、自らの願いが果たされたエレクトラは、今、安堵のうちに静かに地にくずおれる。ムージルの憑かれた思い、今この世を去った熱狂家ムージル、そして無常を語るケル、熱狂家ムージルの人生の横に居つづけるケル、エレクトラとクリソテミス……。二人の「不思議な」38年。この不思議な38年は、あるいは二人の熱狂家の間に成立した、律儀で不器用な師弟の38年であったかもしれない。

ムージルを発見したケル、このケルに対しムージルは終生に互に恩義を感じていた。しかし、心が通い合ったシーンはただの一回、『テルレス』の場面だけである。その後の二人の関係は、折々に気持ちが一方通行のまま、やがて二人ともこの世を後にした。

しかしながら、ムージルとケルの生涯におけるその時々場面を見、そして作家ムージルの文学の営みをそれら個々の場面に重ねてみると、彼らの間の不十分な意思疎通あるいは不完全な相互理解、すなわち「自分流であれ」と求める師とこれに応えようとする忠実な弟子、そこに生まれる二律背反的な困難さは、ムージルの作品が生み出される度に露呈することとなった。しかし、この不完全で不十分であった二人の関係こそは、稀有な文学創造と一つ姿であることの「不思議」が、ここに確認できる。

注

ムージルのテキストは以下のものを使用した。

Robert Musil: *Der Mann ohne Eigenschaften*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978. (本文中に MoE と略記し、その後にページ数を記す)

Robert Musil: *Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978. (本文中ならびに以下の注で P. と略記し、その後にページ数を記す)

Robert Musil: *Tagebücher*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1983. (本文中ならびに以下の注で TI. TII と略記し、その後にページ数を記す)

Robert Musil: *Briefe*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1981. (本文中に BI. と略記し、その後にページ数を記す)

1) ここでの引用は Karl Corino: *Robert Musil und Alfred Kerr*. In: Karl Dinklage u.a. (Hg.): *Robert Musil. Studien zu seinem Werk*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1970, S. 276f.

2) Ebd. S. 276.

3) Alfred Kerr: *Erlebtes. Reisen in die Welt. Werke I-2*. Hrsg. v. Hermann Haarmann, Frankfurt am Main (S. Fischer) 1989, S. 51–57.

4) „Pan“, Jahrgang 3, 1912/13, S. 5–10.

5) Corino: a. a. O., S. 276.

6) Alfred Kerr: a. a. O. I-2, u. Alfred Kerr: *Erlebtes. Deutsche Landschaften, Menschen und Städte. Werke I-1*. Hrsg. v. Günther Rühle, Frankfurt am Main (S. Fischer) 1989.

7) Alfred Kerr: a. a. O. I-2, S. 566.

- 8) Alfred Kerr: „*Ich sage, was zu sagen ist*“. *Theaterkritiken 1893–1919. Werke VII-1*. Hrsg. v. Günther Rühle, Frankfurt am Main (S. Fischer) 1998, S. 836.
- 9) Vgl. Alfred Kerr: *Schauspielkunst*. In: Alfred Kerr: *Essays. Theater. Film. Werke III*. Hrsg. v. Hermann Haarmann u. Klaus Siebenhaar, Frankfurt am Main (S. Fischer) 1991.
- 10) Alfred Kerr: a. a. O. VII-1, S. 136.
- 11) Ebd. S. 139.
- 12) D.h.: Alfred Kerr: *Lesebuch zu Leben und Werk*. Hrsg. v. Hermann Haarmann, Klaus Siebenhaar u. Thomas Wölk, Berlin (Algon) 1987.
- 13) Vgl. Karl Corino: *Robert Musil. Leben und Werk in Bildern und Texten*. Reinbek bei Hamburg 1988, S. 166f.
- 14) Ebd. S. 420.
- 15) TII, S. 742ff. フリゼーはこの会議に出席したムージルについて詳しく書いている。
- 16) Vgl. Hildegard Brenner: *Deutsche Literatur im Exil 1933–1947*. In: *Deutsche Literatur im Exil 1933–1945. Bd.II: Materialien*. Hrsg. v. Heinz Ludwig Arnold. Frankfurt am Main (Atheneum Fischer Taschenbuch) 1974, S. 97. プレンナーはこの会議のハイライト講演として、ムージルの他、ジッド、マックス・ブロートの二人の名前を挙げている。
- 17) 上記の注14) 注15) に言及されている。特に、コリーノが紹介している「労働者新聞」の論調はムージルに対して厳しい。
- 18) Alfred Kerr: a. a. O. VII-2, S. 480.
- 19) Alfred Kerr: a. a. O. VII-1, S. 174.
- 20) Ebd. S. 176.